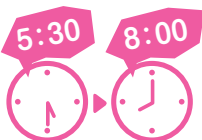


酪農百科

牧場の一日&一年

乳牛は起きている間、いつも口を動かして食べたエサをそしゃくしています。1日に食べる量は、乾草なら約15kg、青草なら50～60kg。水は50～60ℓ飲んで、1日に20～30ℓの生乳を出します。そして約20～40kgの糞と6～12ℓの尿を排泄します。酪農家は、牛たちが快適に過ごせる環境を整え、健康面に気を配り、安全で安心、高品質な生乳を提供できるよう頑張っています。そんな酪農家の一日を紹介しましょう。

ある牧場の一日



掃除・給餌・搾乳

牛たちが排泄した糞尿を処理し、牛舎を清潔に保ちます。掃除が終わったら、牛たちにエサを与えます。はじめに牧草を配り、その後に穀物や配合飼料を与えます。子牛にはお乳を与えます。エサを配り終わったら、牛の乳房を拭いて清潔にし、ミルカーと呼ばれる機械でお乳(生乳)を搾ります。搾乳が終わったら、使用したミルカーやパイプラインなどを洗浄。搾った生乳は、集乳車(タンクローリー車)に渡します。



牛の健康チェック・堆肥作り・牧草の刈り取りetc

朝食を終えてから夕方までの過ごし方は、酪農家によって、あるいは季節によって異なります。お産間近の牛や病気になる牛の様子を確認したり、草場があれば牧草を刈り取ったり、堆肥を作ったり、機械の調整をしたり、必要に応じてさまざまな作業を行います。また、時間があれば夕方の作業に備えて休憩も取ります。



掃除・給餌・搾乳

多くの牧場では、搾乳を朝と夕方の2回行います。夕方も朝と同様、まず牛舎を掃除し、牛にエサをやり、搾乳を行った後、ミルカーなどを洗浄します。



作物の自給に取り組んでいる、ある牧場の四季

牧場の経営スタイルは多彩です。エサ一つ取っても、すべてを外部から購入しているところもありますが、ここでは自給飼料を生産している牧場の1年を紹介します。

※地域や気候によって、栽培する作物の種類や種をまく時期が異なります。



暖かくなってくると、畑に肥料を散布してトウモロコシの種をまきます。前年の秋にまいた牧草は刈り取りの時期を迎えます。収穫した牧草は、長期保存ができるように乾草やサイレージ(牧草などを乳酸発酵させたもの)にします。収穫を終えたら、また牧草の種をまいて2度目の収穫に備えます。

※牧草には一度種をまいたら数年間収穫できるものもあります。



トウモロコシを収穫してサイレージを作ります。この牧場ではソルゴーというイネ科の一年草やスーダングラスといった牧草も夏に収穫します。

※牛は暑さに弱く、夏場には食欲も乳量も落ちます。牧場では牛舎に大型送風機を設置してフル稼働するなどの暑さ対策を行い、牛の食欲や乳量を落とさないように努めます。



春にまいた牧草を収穫して乾草やサイレージにし、来年の春まで牛に食べさせるエサを確保します。刈り取った牧草やサイレージの良し悪しが、今後の牧場経営に影響するため、酪農家は心身ともに大変な時期となります。

※サイレージは長期保存できるだけでなく栄養面にも優れ、牛の食欲を増進させる効果があります。



畑仕事が一段落し、一年で最も落ち着いた時間を過ごせる時期です。牛舎の補修や機械の手入れなど、これまで忙しくてなかなかできなかったことにも取り組みます。牛は出産後、休みなく約10カ月の間、お乳を出してくれます。一緒に生きる酪農家と牛たちの毎日から“牛乳”が生まれます。